

「一歩,一歩」でめざす果てしなきゴール

＜令和6年度前期終業式 校長講話＞

今日は令和6年度のちょうど中間地点となる節目の日です。

昨日10月10日は、1999年までは「体育の日」という祝日でした。祝日になった経緯は、今から60年前1964年の1回目の東京オリンピックの開会式が10月10日だったからです。

では、なぜ東京オリンピックの開会式が10月10日に設定されたかと言えば、それまでの過去の気象に関する統計データで、10月に雨が降る確率が一番低い日とされていたからです。と言われていますが、実は、10月で晴れる確率が実際に一番高かったのは、10日ではなく、その前日の10月9日だというのは、知る人ぞ知る事実です。

いずれにせよ、天気も気温も一年間で一番過ごしやすい季節を迎えました。読書の秋、芸術の秋、食欲の秋、そして、スポーツの秋です。今週末の13日の日曜日には、新潟市で40回目の新潟シティマラソンが開催されます。フルマラソン(42.195km)に約9,000人、ファンラン(10.6km)に約3,000人が出場します。

人生は、よくマラソンに例えられますが、その例えで言うと、今日は折り返し地点ということになります。

折り返しとは、ちょうど全体の半分の地点だという意味で表現されるわけですが、よくよく考えてみると納得がいかない表現ですね。折り返すということは、ピストンして再び元のスタート地点に戻ることですから。元の位置に戻ってリセットをかけずに、もっとより遠くに遠くに、そしてより高みをめざして走り続けなければならないはずです。

いずれにせよ、大事な節目の中間地点を通過するわけですので、その心境も人それぞれでしょう。マラソンであるならば、中間地点を通過する人の感情は、様々だと思います。

「あーまだ半分なのか。まだ半分もあるのか。」と思う人もいれば、「もう半分か。あと半分もがんばろう。」と思う人もいるはずです。

マラソン同様、学校生活や人生の中のまとまった区切りの期間の中で、どちらの考えで中間地点を通過する方が好ましく幸せな生き方かと言えば、言うまでもなく後者なはずです。

もちろん、勉強も部活動も人間関係も、決して楽しいことばかりではありません。辛くて苦しくてせつないことの方がむしろ多いかもしれません。それでも、後者のようにポジティブな発想をすることが重要です。そのためにはどうすればいいか。

一つは、辛くて苦しい中でも、自分なりの喜びや楽しみを見い出す工夫や努力をしてください。

もう一つは、常に想像力を働かせてください。ゴールした時やその先にある達成感・充実感・満足感がどれほどのものか、常に考えながら走り続けてほしいのです。

マラソン・トライアスロン愛好家の一人として、大会に出場して沿道の多くの皆さんから応援をいただくことは本当にありがたく心強く思っています。多くの人が「頑張れ!」「ファイト」と一生懸命応援してくれます。

でも、そんな応援してくれる方々にはたいへん申し訳ないのですが、正直、苦しくても十分頑張っているつもりなのに、「頑張れ!」「ファイト」と声をかけられとかえって辛くなる時があるのです。

子どもたちの中にも、日常生活や学校生活の中で、自分は頑張っているつもりなのに、親や先生に「頑張れ」と言われるのはせつない、と思っている子が少なからずいます。その気持ちがよく理解できます。

しかし、先般9月1日に佐渡国際トライアスロン大会に出場した際、最も苦しくて辛い場面で、「あ、欲しいのはこの声援だ」、という声に出会いました。

「一歩、一歩」。この声を耳にした瞬間。「そうだ、その通りなんだ」と気分が晴れるようでした。

とにかく足を前に出してさえいれば、ゴールはおろか、どこにでもたどり着ける。たとえ立ち止まったとしても、たとえ何歩か後退したとしても、また「一歩、一歩」前に踏み出せばいつかは。とにかくこの一歩を踏み出し続けさえすればやがてゴールできるんだ。そう考えると自然と元気と勇気が湧いてきました。マラソンも人生も前へ!前へ!なのだ。

レース中の我が最大の想像力発揮の幻影は、レース後の夕飯のキンキンに冷えたビールの最初の一歩。その瞬間のために走っています。